



臨床糖尿病支援ネットワーク MANO a MANO

特別号～植木 彬夫先生を偲ぶ～

令和3年11月28日に享年74歳にて永眠されました植木 彬夫先生を偲び、哀悼の意を表するものとして、ここに特別号を発行いたします。

故 植木 彬夫先生を偲ぶ

[当法人代表理事] イムス三芳総合病院 貴田岡 正史

植木 彬夫先生が西東京地域における糖尿病医療連携、人材育成、全国にむけての情報発信等の活動の中心的存在であったことは皆様が良く認識されている事実かと思います。私にとっても、永年にわたる活動の同志であり、ともに戦う戦友と言っても良い存在でした。

私が公立昭和病院に赴任したのが1989年で、植木先生は1992年東京医科大学八王子医療センターに赴任されました。ともに西東京地域にその活動の拠点を構えることになりました。その後、国分寺南口駅前の古ぼけたビルの2階にあった「格さん助さん」という居酒屋(今はもう存在していません)の個室で開かれた西東京臨床糖尿病研究会世話人会で一緒にいたのがともに活動することになった嚆矢と記憶しています。

1999年には療養指導士の育成プログラムを開始、アンケートに基づいて平日の夜に2時間×10講義を実施しました。翌2000年にはCDEJと時を同じくして、12回に拡充して講義を行うとともに西東京糖尿病療養指導士の資格認定を始めました。この制度の開始にあたって公平性、透明性、継続性を担保するため法人化が必要ではないかと考え、検討を始めました。関係者による熱心な討論を重ねた結果、西東京臨床糖尿病研究会のNPO法人化が決まりました。この過程で植木先生のリーダーシップは極めて貴重なものでした。

2002年のNPO設立時には副理事長の任につかれ、治験臨床研究関連事業として倫理委員会委員長、広報宣伝事業として広報委員会委員長、HP運営にと多方面でご活躍されました。間接事業として、西東京EBMを目指す糖尿病薬物療法研究会、糖尿病治療多摩懇話会、東京臨床糖尿病運動療法研究会、糖尿病と認知症研究会等を主催され広く全国に情報発信を行われました。

2016年7月にNPO法人西東京臨床糖尿病研究会は一般社団法人臨床糖尿病支援ネットワークにその業務を引き継ぎ、活動を継続することになりました。植木先生は業務執行理事として認定委員会委員長、顕彰委員会委員長を担当されてご活躍されるとともに、上記の間接事業を共催事業として継続されました。

また、「災害時糖尿病サバイバルマニュアル」や『糖尿病在宅患者の療養・介護支援ガイド「糖尿病を持つ人が在宅で健やかに暮らすために」』の企画、作成、編集の中心的存在としてご尽力されました。この両者ともに全国的に極めて評価の高いマニュアルとして活用されております。

以上のように、植木先生の当法人におけるご活躍は多岐にわたり、その貢献度は比類無いものでした。しかもこの事は植木先生の広範囲にわたる御実績の極々一部に過ぎません。しかし、当法人にとっては、植木先生の果たされてきた役割を穴埋めすることは極めて困難な事と認識しております。

当法人は、ちょうど世代交代の時期でもあり、次世代を担う人材に期待できる体制づくりが進行しております。植木先生とともに歩んできた世代の我々は、次世代へのバトンタッチに尽力することで当法人の継続性を担保してまいりたいと存じます。植木先生にも天上から暖かく見守っていただければと思います。合掌



植木 彬夫先生を偲んで

がんの内科 菅野 一男

夜遅く国分寺の臨床糖尿病支援ネットワーク事務局で、お互いに疲れた表情を浮かべながら、親しく多くの時間を一緒に過ごした植木先生が居なくなりました。昔、大学の研究室で夜中まで苦勞しながら実験をし、苦樂を共にした仲間とは、独特の絆に結ばれていると感じているが、同じような深いつながりと尊敬の念の対象の植木先生が、72歳になって、死を考えることが多くなってきた私に、強烈に現実の死を顔面にたたきつけてきた。近藤甲斐夫先生が、様々な思いを意識して話しかけてきたときの表情は、ずっと私の脳の片隅に控えているが、植木先生はそのような言葉を全く残さず、突然消えてしまった。

最近、いろんな本で、宇宙の盛衰に係る巨大な時間軸と死についての記載を目にし、耳にして、生の儚さに思いが傾きすぎる気配が濃い中で、植木先生と一緒に過ごした時間を思い出す。リブレが出回り始めたばかりの頃から、植木先生は友人のスタッフと協力してリブレとSMBG各種機器との相関性を調べ、食事内容、食事のとり方での血糖の変化をいち早くデータにまとめて私たちに提示され、それをもとに頻繁に議論を繰り返したが、私にとっては、糖尿病の新しい世界が垣間見えてきた、ドキドキする時間だった。このようなドキドキする機会というのは私くらいの年齢になるとなかなかないのだが、植木先生と一緒にいてそんな時間を味わうことができた。私たちの食事指導の方法が劇的に変化したのも、当然の帰結だった。

命あるものも、命なきものもいずれは消えていくということはわかっているのだが、その中でつかの間、生きているという実感をもてる時を植木先生が用意してくれた。ヒトとのつながりが自分を変えてくれるが、植木先生は私を変えてくれた大事な盟友だ。



植木 彬夫先生を偲んで

杏林大学医学部糖尿病・内分泌・代謝内科／近藤医院 近藤 琢磨

植木先生のご逝去に対し、改めてご冥福をお祈り申し上げます。

振り返ってみますと、先生に直接お世話になる前から、私の父である故 近藤 甲斐夫から先生のことをよく伺っていました。臨床糖尿病支援ネットワークの前身である西東京臨床糖尿病研究会の頃から多くの仲間に父がお世話になってきたなかで、どうやら先生と父は、特に「馬が合う」関係だったようです。いろいろなエピソードを父の生前に聞いていたため、私が東京に戻ってきた当初から、ついつい失礼なことを申し上げてしまうぐらい、親しみを込めて何でもお話しさせていただいていました。今思うと、大らかな先生のお人柄の中に亡くなった父の姿をみていたのかもしれない。

私自身も多くの研究会、講演会、委員会等でご一緒させていただきました。深い見識を基にした鋭い考察をされる一方で一人一人の患者さんを大切にされる姿勢を貫かれ、医学者として、そして医師として、大変勉強させていただきました。そのような先生との一番の思い出は、「糖尿病在宅患者の療養・介護支援ガイド～糖尿病を持つ人が在宅で健やかに暮らすために～」の作成に一緒に携わったことです。薬剤師の森 貴幸先生、小林 庸子先生とともに、何度も夜遅くから集まって編集作業を行いました。長い月日がかかった分、ようやく完成、印刷に漕ぎ着けたときの達成感は今でも忘れられません。このような達成感、充実感を今後も共有できるよう、先生のご遺志とともに残されたメンバー皆でしっかり活動して参りたいと考えております。植木先生、本当にありがとうございました。



植木先生を偲ぶ(僕が植木先生で思い浮かぶこと)

伊藤内科クリニック 伊藤 真一

- まだ東京医大助教授時代に当会に入会され初めてお会いした時から、僕の年齢が少し下だったが何でも相談でき、僕にとっては「兄貴分」だった
- この研究会から誕生した唯一の医学部大学教授
- 八王子医療センターの教授時代自宅に滅多にお帰りにならず教授室に寝袋を持ち込み寝泊まりしていたこと——結果いつも病院にいらっしや24時間オンコール状態であったこと
- メチャクチャITに強く東京医科大の新病院のITシステムを構築した
- 医学統計学の権威で何も知らない小生に懇切丁寧随分教えてくれた
- 僕が糖尿病専門医なのに学会誌に投稿したことがなかったが70歳代ではじめて「雑誌糖尿病」に投稿した時、共著になっていただき上梓できた
- ヒマラヤを登頂し日本的な医師登山家であったこと
- 講演会を聴きながら、その場で講演内容のサマリーしパソコンに書き込み、講演終了後そのスライドを使って聴衆の先生方にレクチャーしていたこと
- 晩年は「小生の故郷神奈川県藤沢の鵠沼」にお住まいがあり講演会の後遠路はるばる帰宅されていたこと——走馬灯のように思い出される——本当の仲間を失った——残念——口惜しい——寂しい——合掌



植木先生の忠告には従わないよ！！

武居小児科医院 武居 正郎

植木先生が亡くなられた連絡を臨床糖尿病支援ネットワークからもらいました。『え、どうして？うそでしょ！！』事務局に連絡をして事情を聞きました。未だに信じられません。

植木先生は臨床に基づいた研究を盛んにされていました。特にリブレの研究では食後の血糖の上昇とリブレでの上昇の反応の関係のズレでは、ある程度の予測はしていましたがきれいな数値を出されており、大変刺激を受けました。多摩地区で臨床を行いそれをまとめられ、それに基づいた研究を行われ、また地域の糖尿病に係るスタッフの教育を熱心に行われていました。自宅は藤沢なので、遅くなると病院に泊まることも日常でした。

僕も山に時々登りますが、植木先生はエベレストの登山隊と一緒に途中まで行ったり、また上高地の診療所には責任者に成ったりしておられました。当研究会の会議にも上高地から参加されるなど僕の想像を超える生活をされていました。

僕は6年前に心筋梗塞になりステントを3本入れました。その直後に植木先生に有った時に先生から「僕もステントが入っているけれど普通に働いているから、君も今まで通りに頑張って働いてね!!!」と言われましたので、「そうか、今まで通りにやろう」と思いました。でも、先生の突然の訃報を聞き、少々の無理はしても先生のような激しい無理はしないようにと考え直しました。

僕より若くして亡くなった植木先生、安らかにお休みください。僕はゆっくと後から行きますので!!!!



先生からたくさんのことを学びました

医療法人ユスタヴィア 理事長 宮川 高一

植木 彬夫先生がご逝去されたことがいまだに信じられません。最後にお会いしたのは9月27日の研究会であつたと思います。「日常診療におけるコロナ患者への対応」という演題で、本当に先生らしい患者さんへの愛情のこもった、そしてコロナ禍での医療人の心構えを教えていただいた素晴らしいご講演をだつたと記憶しています。その後はコロナ禍で直接お会いすることができませんでしたが、オンラインの講演が多く、毎週のように座長か、講演者でお話ししていたと思います。急にお話しできなくなったことがまだ現実として受け止めきれないでいます。

先生に最初にお会いしたのは、1992年だつたと思います。先生が東京医大八王子医療センターに赴任された時でした。当時は故 近藤 甲斐夫先生、伊藤 眞一先生のもとに西東京臨床糖尿病研究会がつくられて、6年目の頃でした。国分寺に当時あつた「格さん助さん」という店で毎回世話人会があり、研究会の発展方向など激論を交わしていた発展の時期でした。その時先生が「医療連携」や「メディカルスタッフへの教育」に深い造詣と熱意を持たれていることに心を打たれました。「本当に大学の先生？すごい臨床家だ！」というのが率直な感想でした。私は先生から「患者さんの見方」から「医療連携の在り方」「臨床研究の方法論」ひいては「コロナ禍における医療人の役割」までたくさんのことを学びました。

一般社団法人 臨床糖尿病支援ネットワークがこれまで発展してきたのは貴田岡 正史代表理事とともに、植木 彬夫先生のご尽力が多岐であつたと思います。当法人には非常に大きな損失です。ご冥福をお祈りいたします。



植木 彬夫先生を偲んで

高村内科クリニック 高村 宏

植木先生の声が聞こえてこない外来でこの文章を書いています。

植木先生が亡くなった後、多くの患者さんたちは先生を偲んで「よく話を聴いてくれた」とともに「よく話をしてくれた」とも述べています。先生が担当されていたある患者さんは、先生からご自身の故郷の話や自分の健康状態などプライベートな内容をもお聞きした。だから私は植木先生のことをよく知っていると。植木先生はその患者さんにとって特別な存在であつたと言います。コントロールが旨いかない、精神的な問題を抱えているといったことで私が困ってお願いした、その一人一人の患者さんにとって特別な存在になっていたのだと改めて知りました。

隣の診察室から聞こえてくる植木先生の語り口は、どこか楽しそうで、時に父親のようで時に母親のようで、友人のようでもありました。今、植木先生から引き継いだ患者さんのカルテからは、その治療が個々にきめ細かく計画されていること、また患者さんに委ねた大胆なインスリン治療などもあり、改めて驚くとともに患者さんとの信頼関係の重要性を学ばせていただいています。

一方院内勉強会でのレクチャー、西多摩医療圏での講演など、多岐にわたるテーマを我々の腑に落ちる内容で解説いただきました。医師、コメディカル、MRの分け隔てなく対応する姿は臨床に真摯に向かう植木先生そのものでした。

コメディカルの学会発表に際しては、休日もいとわず熱心に指導されていた姿は忘れられません。先生の臨床での姿勢は我々の心に刻み込まれ、今後も生き続けると確信しています。

先生には10年を超えて勤務いただきましたことに深謝するとともに、ご冥福をお祈り申し上げます。

人生の師との突然の別れ

東京医科大学八王子医療センター 大野 敦

当法人業務執行理事の植木彬夫先生は2021年10月19日の朝に脳出血で倒れて闘病されておりましたが、11月28日に逝去されました。安らかな眠りにつかれますよう、お祈り申し上げます。人生の師としてご指導いただきました先生との思い出を語ることで、追悼の言葉とさせていただきます。

先生との出会いは、1977年に東京医科大学に入学後「社会医学研究会」に入部し、長野県浪合村【当時は無医村、現在は飯田市に統合】で家庭訪問と住民健診を行っていた夏合宿です。OBではなかったのですが、OBの友人としてわざわざ健診の手伝いに何度か来ていただきました。

1983年に卒業して東京医大内科学第三講座に入局すると先生がおられ、1984～85年の市立根室病院への出張時には激励に来ていただき、1988年～1991年の総合新川橋病院に出張時には数多くの臨床研究のサポート、ライフワークである「糖尿病患者の内科・眼科連携への取り組み」のきっかけを貰いました。

1992年から八王子医療センターに赴任されると、学生時代から地域医療に興味のあった私を誘っていただき、1993～2007年に直接の上司としてご指導いただきました。その範囲は院内にとどまらず、西東京臨床糖尿病研究会の時代から八王子糖尿病ネットワーク(HADNet)・糖尿病治療多摩懇話会等の様々な活動で地域医療に貢献するとともに、人材育成ならびに学会を通じての情報発信の重要性を学びました。

2007年から八王子医療センター糖尿病・内分泌・代謝内科の科長を引き継ぎましたが、人を引き付ける全人的な魅力だけは真似ができず、亡くなられて先生との思い出を語られる多くの関係者の言葉から改めてその偉大な功績を実感しております。残された者はそれを少しでも引き継げればと思いますので、天国から見守ってください。長い間本当にありがとうございました。

植木先生！これからもご指導、お願い申し上げます HECサイエンスクリニック 調 進一郎

1985年：東京医大第三内科に入局した時、先生は医局長でした。右も左もわからないボクに色々笑顔で教えてくれました。

1987年：大船中央病院に出向中、学会発表準備のために先生の自宅に伺いました。奥様にはお食事までごちそうになりました。奥様とはご家族で上高地に行く時もご一緒させていただいたのも楽しい思い出の一つです。その後、先生は私の学位のための実験も夜遅くまで指導してくださいました。

1992年：八王子医療センターに出向し歓迎会を開いていただいた夜、先生とまた仕事ができるのがうれしいと泣きました。そして、「先生には“はい”か“yes”のどちらかしか言いません！」と誓いました。

2004年：新川橋病院に赴任し、「いちょうの会」という患者会を作りました。八王子医療センターの友の会は「ぎんなんの会」です。「“ぎんなん”も“いちょう”も漢字で書けば“銀杏”。先生に教わったことを川崎の地でも実践したいので、“いちょうの会”と名付けさせてください」と先生にお願いし、名付け親になっていただきました。

2013年：先生が八王子医療センター教授退任を機に現在のサイエンスクリニックに週1コマの外来をお願いしました。また、一緒に診療できて楽しかったです。

2021年：先生のお通夜に伺いましたが、棺の中のお顔には手を合わせずに失礼させていただきました。先生とお別れするつもりはないからです。「どんな事でも全力で取り組みば何事も楽しくなるんだよ」という先生の教えを忘れずに頑張ります。植木先生！これからもご指導、お願い申し上げます。



植木 彬夫先生のご逝去を悼む 東京医科大学八王子医療センター糖尿病・内分泌・代謝内科 松下 隆哉

東京医科大学名誉教授であり、一般社団法人 臨床糖尿病支援ネットワーク理事の植木 彬夫先生がご逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。2021年10月19日に福生で倒れられ、青梅市立総合病院に救急搬送され、集学的な治療を受けられ、2021年11月28日に永眠されました(享年74歳)。

植木先生は1973年に東京医科大学を卒業され、1973年に東京医科大学内科学第三講座に入局された後、一貫して診療だけでなく、教育・研究に従事されました。1992年に東京医科大学八王子医療センターに部長として赴任され、1992年に助教授、2002年には東京医科大学内科学第三講座の教授に就任されています。東京医科大学八王子医療センターでは、糖尿病の臨床に力を注がれ、八王子地区の糖尿病医療連携の礎を築かれたのです。東京医科大学では、上高地診療所の運営や大学全体の情報管理でも重要な役割を担われました。1983年には前年に本格稼働した東京医科大学上高地診療所の所長代理、2003年に所長を務められ、その間も上高地診療所での診療も続けられていました。他にも、情報管理では2003年東京医科大学八王子医療センター情報部部長、2009年東京医科大学総合情報部部長を務められています。

植木先生は、1986年に設立され、2002年からNPO法人化された西東京臨床糖尿病研究会、その後に続いた一般社団法人 臨床糖尿病支援ネットワークでも中心的な役割を担われています。植木先生は、西東京地区の糖尿病医療連携やメディカル・スタッフの育成にも力を注がれ続けました。日本糖尿病学会でも長年、評議員として学会では精力的にご活躍され、2008年には日本糖尿病学会関東甲信越支部の幹事も務められています。植木先生は日々の診療において、患者中心の医療を実践され、東京医科大学、東京医科大学八王子医療センター、一般社団法人 臨床糖尿病支援ネットワークに多大なる貢献をされました。お亡くなりになる当日もご診療に向かわれているところであったと聞いております。自分のことはさておき、目の前にいる患者さんのため、科のため、医療センターのため、臨床糖尿病支援ネットワークのため、大学のため、学会のため、地域のために何をなすべきかを常に考えておられたのです。

植木先生は、2013年に東京医科大学を退官されても、糖尿病診療を現役時代と変わらない患者さんの診療を行われていました。2020年から始まった新型コロナウイルス感染症の流行では、糖尿病患者さんに重症化リスクが高いため、診療にもさらにお力が入っていると感じたものです。この頃より、感染対策の一環として始まったWebでの講演会にも当初から出席され、糖尿病患者さんへの感染対策やワクチン接種の啓蒙についての重要性をお話しされ、常に糖尿病患者さん中心での診療態度に感銘を受けていました。

西東京地区を中心とした活動の場である臨床糖尿病支援ネットワークでは、西東京臨床糖尿病研究会の頃より、メディカル・スタッフの育成に尽力されており、植木先生から教えを受け糖尿病診療の面白さ・やりがい・難しさを教えていた方は少なくないはずです。我々の東京医科大学八王子医療センターでも院内のメディカル・スタッフと共に、チーム医療を導入し、多くの糖尿病患者さんの診療を受け入れました。八王子地区では、糖尿病専門医が常勤でいる基幹病院は少ないため、実地医家の先生方とHADnet (Hachioji DM Network)を立ち上げ、八王子地区での糖尿病診療の向上に奮闘されました。

私は東京医科大学八王子医療センターに2009年に赴任し、大野 敦先生の元で勉強しましたので、直接ご指導いただく機会も多くはありませんでした。東京医科大学八王子医療センターを退官された後に非常勤で外来をされていた時にも、すぐ横の診察室から患者さんへの熱意に圧倒されたものです。さらに、臨床糖尿病支援ネットワークでの研究会は植木先生にお会いできる機会ですので、非常に楽しみにしておりました。糖尿病診療に対する志の高さには感銘を受けていました。メディカル・スタッフと共に、糖尿病患者さんの診療を行っていることや、いまだに保険診療での指導が認められていない運動療法を長年にわたり牽引されたことです。

植木先生は東京医科大学八王子医療センターをはじめ、臨床糖尿病支援ネットワークでは、多くの人材を育成されてきました。私も植木先生の薫陶を受けた一人で、先生のご指導により3代目として、東京医科大学八王子医療センター糖尿病・内分泌・代謝内科を引き継ぎました。先生を師として教室運営や病院活動、学会活動などに携わってきましたが、先生の足元にも及びません。不肖の弟子としては今後もういろいろとご相談したいと思っていましたが、それも叶いません。残念です。少し早すぎます。最後になりましたが、先生のご貢献に感謝するとともに、先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。どうぞ、ごゆっくりお休みください。

植木先生から学んだ「心」 東京医科大学八王子医療センター糖尿病・内分泌・代謝内科 天川 淑宏

植木先生は、物事のとらえ方が理論的なのにひけらかさず、医師という立場や肩書にとらわれず、患者さんにも私たちコメディカルにも、同じように接して下さる心優しい先生。そして、発想力に富み、誰も考えつかないアイデアが時にひとりの人生を変えてしまうことも。その変えられたひとりが私です。

2001年のある日、突然のかかってきた電話、「植木です、明日から医療センターで運動指導してくれないか」唐突な話。この発想は、日本の医療界ではありえない。糖尿病治療の1つ運動療法に理学療法士が専属で携わることはない、その理由は診療報酬が与えられていないからである。しかし、植木先生は「患者さんにとって、運動は絵に描いた餅のような指導であってはならない、もっぱら動きたくない患者さんが、ただ運動しないさいと口先だけで言われても心も体も動こうとはしない、できないことをしなさいと言われれば……」。そして、患者にとって

「糖尿病の治療は一生のこと、その治療の1つに運動療法が適うことが欠かせない、診療報酬は患者が望む医療であれば与えられる」。「その運動療法と一緒に目指して欲しい」。私は、理学療法士の異端児と言われてもこの医療に掛けよう決意。そして、植木先生のもとで歩んできた軌跡には、患者に向き合う10年間のJDOIT3、運動療法をメディカルスタッフに伝える12年間のスキルアップセミナー、運動の見える化へMETsと歩数の関係など、臨床、セミナー、研究とたった700文字の原稿では言い尽くせない多くのチャレンジがあり、そして、植木先生から学んだことは「万能一心」であること。その教えが私の心に生き続けています。

**言葉にできないほどの感謝を込めて 神奈川県立保健福祉大学 実践教育センター 和田 幹子**

植木先生が旅立たれて早いもので3か月以上の月日が経過しました。まだ植木先生と連絡がとれないという実感がなく、LINEにも時々メールを送ってしまいます。振り返ると30年余り、冬の初めは次年度の糖尿病学会の演題登録にあたり植木先生に色々とアドバイスをいただいていた。毎年、私は延長期間のメ切時間ギリギリまで粘るのですが、植木先生はその前日にはエントリーを終えていました。期せずして11月28日は演題登録延長メ切日前日、植木先生は演題登録を終えて旅立たれたのかな…と思っています。そしてこの時期は、例年通りなら演題登録と並行して上高地の診療所を閉めに行って、戻られてから私や他の仲間と一緒に忘年会をするという年末を過ごされていました。

そして今頃は2月の糖尿病医療学学会の地方会に向けて座長の先生方と打ち合わせなど準備をされている頃で、私も例年はその準備の様子を伺い、色々と学ばせていただくのですが、今年はそのようなやりとりもないままに暦だけは春になろうとしています。

糖尿病ケアに関連した年間行事の至るところに植木先生がいっぱいいます。「植木先生、去年の忘年会が終わっていません。新年会…遅くなってもいいですよ」「学会の抄録を見ていただいていませんが、発表の時は見守ってくださいね」「医療学学会、今年はどんな感じですか？進歩は参加されますか？」「今年の学会も会期中にお誕生日を迎えますね。みんなと一緒に祝いましょう」なんて植木先生を傍に感じながら過ごしていくのかな…と思っています。多くの教えをいただきましたことに言葉にできないほどの感謝を込めて。植木先生、どれもこれもあたたかい思い出ばかりです。本当にありがとうございました。



植木先生を偲んで

北里大学薬学部／北里大学北里研究所病院薬剤部 井上 岳

私が初めて植木先生から直接ご指導いただいたのは、当時勤務されていた東京医科大学八王子医療センターで、1997年に小生が糖尿病病棟担当薬剤師として勤務した時でした。それ以来、数えきれないほどお世話いただいております。そもそも私が糖尿病の道に進むことになったのも、植木先生から数えきれないほどの学びがあったからです。初めて糖尿病病棟を担当する際に、植木先生からいただいた最初の言葉は、「井上君、薬剤師が薬の説明をするのはわかるが、俺たちも薬の説明をしているよ。でもなぜ薬剤師が病棟に挙がって患者さんに説明しなければいけないの？」でした。当時の自分には植木先生にご納得いただける答えをすぐには出せませんでした。その後やっとの思いで、「患者さんの薬物療法に対して、有効性や安全性だけではなくQOLも含め、薬剤師が責任も持つためには、患者さんと直接会う必要があるので、病棟に挙がらせてください。」と植木先生にお話ししたところ、「やっと分かったか！明日からカンファレンスに出なさい。」と仰っていただきました。そこから糖尿病チームに参加させていただき、チーム医療とは何かも含め、様々なことを学ばせていただきました。

その後、1998年に発足しました地域医療連携「HADNet (Hachioji DM Networks)」で、地域医療連携とは何なのか、たくさんのことを学ばせていただいたことが小生の土台となっております。現在では、本法人である臨床糖尿病支援ネットワークの様々な事業に参加させていただいております。

植木先生はとても明るく、いつも前向きで、我々医療者のみならず、患者さんも引きつけるお人柄であり、先生が歩まれて来た先生のお姿を通して、数多くの医療者の心に火を付けたと実感しております。恩師である植木 彬夫先生につけていただいた心の火を大切に守り続けていくことで、先生の恩に報いていければと考えております。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

HADNet (Hachioji DM Networks)

八王子医療センターと地域開業医との糖尿病のための医療連携
1998年発足

3つのconcepts

- 1 顔が見える医療連携
- 2 地域医療レベル向上のための連携
- 3 患者の立場に立った連携

仕事を通じてよく一緒に遊びました

朝比奈クリニック 朝比奈 崇介

植木先生の人柄に惹かれ、2012年から朝比奈クリニックにおいでいただくようになり、9年間隣のブースで一緒に診療をし、よく患者さんの話をしました。学会では一緒に飲みに行ったり、糖尿病劇場に一緒に行ったり、仕事というより仕事を通じて一緒に遊んでいた先生でした。先生は患者さんにもスタッフにも優しく、お茶目で、一緒に仕事をして幸せな存在でした。2020年第63回糖尿病学会学術集会では私が企画した

パネルディスカッションにも登場していただきました。もし一つだけ思い出を、と言われれば、2014年7月に西東京の仲間と秋川溪谷に釣りに行ったことでしょうか。その時の写真を載せておきますね。本当にありがとうございました。



植木先生は糖尿病医療連携の先達でした

調布東山病院 戸塚 康男

私は調布東山病院の前任地のNTT東日本関東病院で、品川区、目黒区、大田区の先生方との糖尿病医療連携を始めましたが、その頃、八王子糖尿病ネットワーク(HADNet)の植木先生のご活躍を知り、参考にさせていただいておりました。2005年に調布東山病院に赴任してからは、研究会などで植木先生から親しくお声を掛けていただき、調布での医療連携の励みとなっておりました。研究発表の場では質疑を通じて研究会の充実に努められ、若手臨床研究者の育成にお心をくだいていらっしゃるお姿に、いつも感銘を受けておりました。植木先生の長年のご業績に敬意を表すとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

植木先生への御礼

住友内分泌クリニック 住友 秀孝

植木彬夫先生がご逝去されました。心より哀悼の意を表します。20年位昔になるでしょうか、糖尿病治療多摩懇話会にて、糖尿病腎症アップデートを1時間やれとのご指示あり。何とか講演した後に評価を伺った所、うん・・でした。大変嬉しかったことを思えています。

植木先生、本当にありがとうございました。どうぞゆっくりしてください。

植木 彬夫先生を偲んで

日本医科大学多摩永山病院 小谷 英太郎

私が植木先生と初めてお会いしたのがいつか正確には思い出せませんが、おそらく多摩地区の糖尿病関連の講演会とその懇親会であったと思います。私が演者の時は会場から鋭い質問を投げかけられましたが、懇親会ではいつも気さくにお話いただきました。植木先生が代表世話人をされていた糖尿病治療多摩懇話会では、講演を聞きながらその場でスライドを作成して閉会の辞を述べる技に毎回感心させられました。

先生が入院されたことを知ったのは、何度も延期になり、ようやく開催が2021年10月20日に決まった第43回糖尿病治療多摩懇話会の前日でした。当日は急遽、植木先生ならどのような閉会の辞でおまとめになるのかを考えながら、代わりに座長を務めさせていただきました。その後の容態を心配しておりましたが11月28日にご逝去されたことを知り、大変残念でなりません。心よりご冥福をお祈りいたします。

植木先生の笑顔をお忘れません

加藤内科クリニック 加藤 光敏

「東に住んでいる西東京の仲間」として西東京の皆様と何かとご一緒させていただくようになって早くも24年になります。先生とお会いしたのもその頃でしたでしょうか。さて今から13年前のこと、高尾の森のわくわくビレッジという所で先生が責任者だった「西東京糖尿病運動指導スキルアップセミナー」の泊まりがけの会に参加させていただいた時です。先生といろいろ話す機会がありましたが、患者さんはもちろん医療スタッフのことを思う素晴らしい先生と感銘を受けました。「セミナーに参加して植木先生といろいろ話ができて本当に良かった！暖かな気持ちになった」と心から思いました。ありがとうございました！

体育館で先生がボールを蹴り、すべってドシンと倒れ、周囲はびつくりしましたが、先生の笑顔でほっとしたシーンがありました。先生のちょっと照れた、でも明るい満面の笑顔をお忘れません。いささか早すぎる旅立ちでしたが、先生は今天国で、周囲の皆さんの健康を気遣いながら明るく過ごしているはずですね！心からご冥福をお祈り申し上げます。



植木先生の思い出

総合相模更生病院 血液浄化センター 野村 幸範

私が、八王子に赴任したのは2003年のことです。それ以来、糖尿病心理の会ではたびたび同じグループワークになりました。2011年の心理の会では近くのカラオケ屋さんで歓談の場も持つことができました。精力的に活動されて感服ばかりです。藤沢の自宅から車通勤されていると聞き驚きました。スライド作りがあるから、抄録を書いているから、が口癖のようでした。糖尿病高齢者ガイドラインの設定は先生のご尽力の賜物です。教育の面でも臨床の面でも先達でした。お疲れ様でした。ご冥福をお祈り申し上げます。

「糖尿病在宅患者の療養・介護支援ガイド」作成の思い出 元東京都多摩府中保健所 五十里 一秋

糖尿病臨床支援ネットワークからお声がけいただき、支援ガイドに関わらせてもらいました。植木先生をはじめ、多くの先輩の先生方と検討を重ねました。先生方が日常臨床で触れる機会が少ない「地域包括ケアシステム」や歯科医療をガイドに入れる際、諸先輩に遠慮なく発言させてもらいましたが、植木先生は私の意見や提案した資料を取り入れられ、特に、地域包括ケアシステムのイメージ図はそのまま採用してもらいました。私は、ベテランになっても新しいことを学ぼうとする先生の真摯な姿勢に心を打たれました。急な知らせで驚きました。ご冥福をお祈りいたします。

お優しい笑顔の植木先生

大泉生協病院 浜口 裕子

2015年西東京糖尿病療養指導士の試験に合格し、立川の授与式に参加しました。当日家族の用事で鹿児島から羽田に行き、そのまま立川に向かいました。授与式では植木先生が、ひとりひとり名前を呼んでくださって「これからですね。」とお優しくお声かけくださいました。とてもお優しいあたたかい笑顔でお声かけいただき、本当にびっくりし感激いたしました。その翌日にまた鹿児島に戻らなければならなかったのですが、授与式に参加でき本当によかったと植木先生にお会いでき思いました。

植木先生の患者さんの立場を考え大切にするという患者ファーストなお考えを心にとどめ、初心を忘れないようにしなければと思い、今まで患者さんに接しようと思ってきました。先日看護学生さん向けに話す内容を探し資料を読み返していた時に、植木先生がお書きになられた糖尿病に関しての資料がとても詳しく記載されており、改めて植木先生の偉大さを感じておりました。あのあたたかい優しい笑顔が目に残ります。

植木先生、ありがとうございました。

尊敬と感謝の思い

多摩センタークリニックみらい 名嘉真 香小里

高村内科クリニックで13年間共にお仕事をさせていただきました。1型糖尿病発症からいろいろな病院を転々とし、医療不信から診察室にさえ入れなかった女の子が、数回の診察で植木先生に笑顔を見せました。精神疾患や経済的理由など様々な問題を抱えた患者さんが植木先生の外来にはたくさんいらしていました。患者さんがどうしたいのかをきちんと聞いて話し合うこと。当たり前の医療が現実にはできていません。

先生はどんなにだめでも受け入れてくれる絶対の安心感があるのだと思います。糖尿病治療は頭で理解できても実行できないことの多い病です。その人らしく生きていく時にうまくいかないこともたくさんあり、共に考えられる医師でした。植木先生からはそんな人間らしさと深さを感じました。また先生から臨床研究の魅力を学びました。統計は難しかったけれど、わかった時のうれしい気持ちを感じることができたのは先生の指導のおかげです。研究を行う過程での努力は、なぜ研究が必要なのかを私に教えてくれました。植木先生は私にとって尊敬する最高の恩師です。感謝の思いをきちんと伝えられなかったことが心残りです。

植木 彬夫先生に捧げる言葉

元多摩北部医療センター 内分泌・代謝内科 中野 忠澄

植木先生が急逝されました。思いもよらない悲報に接し、残念でなりません。

先生は、西東京地域や我が国における患者中心の糖尿病医療のあり方について常に模索され、本「臨床糖尿病支援ネットワーク」の例会や糖尿病学会等におけるご尽力の大きさ、重さは、言葉には尽くせません。それと並んで人間としての大きさ、温かさ、豊かさと冷静さを兼備された巨人でした。あの人懐っこい笑顔とお話ぶりは、人間として大切な言葉、考え、心を工まずして人を包み込まずには措かなかった先生でした。

本会の心柱として、医療者のあるべき姿と心をわたしたちに遺してくださいました。植木 彬夫先生に対して、私達が真に支えられる医療者として全うしてゆくことができれば、先生はお身体を揺すって、満面の笑顔で応えてくださるものと信じます。永年一緒に勉強した仲間として、今は先生への尊敬の念と深い感謝を新たにし、哀悼の言葉と致します。

植木 彬夫先生、ありがとうございました。



糖尿病療養指導担当者のセミナー分科会の先生 多摩センタークリニックみらい 國貞 真世

私にとってずっと雲の上の存在だった植木先生と親しくさせていただく切欠になったのは、「糖尿病療養指導担当者のためのセミナー」でした。臨床研究の分科会を立ち上げるに当たって、先生にご協力をお願いしたところ、「この会では毎年講演は頼まれるけれど、分科会は声を掛けてもらえなくて寂しかったんだよ。」と、快く引き受けてくださいました。

臨床研究について学ぶ機会が全く無かった私にとって、発表当日までの準備期間は、毎回【超一流教授のゼミナール】を受講している様でした(しかも無料で！)。読んでみても全く理解できなかったテキストが、先生の講義を通して聞くと、頭の中にすっと入りました。後で、先生が何冊もの初心者向けの本に目を通して「初心者が一体何処で躓くのか？」勉強してらっしゃったと側聞しました。自ら学問を究めるに留まらず、人を育てることも、本当にお好きだったのだと思います。いつも楽しそうに講義してくださいました。先生、ありがとうございました。

～分科会を代表して～

	分科会のタイトル	学会発表
2013年 第18回	臨床研究の作り方	口演
2014年 第19回	臨床研究の作り方 ～統計を始めてみよう～	ポスター
2015年 第20回	民間療法に振り回されない療養指導 ～データから読み取る落とし穴～	ポスター① ポスター②
2016年 第21回	糖尿病臨床研究のデータを読み解く ～QOLを規定する因子を探してみよう～	ポスター
2017年 第22回	糖尿病治療の論文を紐解いてみよう ～いろいろな論文を読んでみよう～	ポスター① ポスター②
2018年 第23回	低血糖・高血糖をどう防ぐか？ ～糖尿病大規模研究から実臨床への応用法を考えよう～	ポスター 口演
2019年 第24回	糖尿病患者の治療満足度の聞き方・測り方 ～臨床にフィードバックするために～	オンデマンド

追悼 植木彬夫先生 第22回EBMの会にて祈りを捧ぐ 多摩北部医療センター 内分泌・代謝内科 藤田 寛子

あまりに急なお別れでした。悲しむ時間もなく、第22回のEBMの会を迎えました。予定では、植木先生が私の症例提示の座長をしてくださることになっていました。植木先生には数えきれないほどのご指導をいただきましたが、EBMの会(正式名:西東京EBMをめざす 糖尿病薬物治療研究会)は、その一つの機会を与えてくれた貴重な活動でした。

第13回EBMの会で講演を担当させていただいた際、植木先生からいただいたお言葉が、今も深く心に残っています。

「食事も運動も遵守したいのに、事情でできない。でも言えない」という状態におかれた患者のCGM(持続間質血糖濃度モニタリング)の中ににじむ苦悩・・・この血糖の動きがどうしてもわからなくて困っているのですねとお話したとき、「実は」と初めて患者が打ち明けてくださった・・・など、日常診療そのものを織り込んだ内容で、症例提示中心にお話しさせていただきました。

“先生のプレゼンテーション、いいんだよな。そこにいる患者像がそのまま伝わってくる。僕らどうしても臨床研究はどうだったとか、そっちから入るけど、先生は一人の患者から入って、皆に通じるとても大事なことを言ってくれるよね。”

私は、臨床研究の勉強など全く足りておらず、一緒に悩みながら生きている医師と患者の日常を紹介しつつ当時普及し始めたばかりのCGMの有用性を示すのが精いっぱいだったのですが、植木先生のこの一言は、その後の私の活動の基調になりました。

その後、植木先生のご講演を何度も拝聴し、先生がいかに患者一人ひとりを大切にして沢山の時間を割いて向き合っておられるかということを目の当たりにしました。あの言葉は、まさに先生が実践しておられた医療の一つであり、先生はそれを教えてくださったのでしょう。改めて植木先生だからこその有り難い一言だったと、かみしめております。その後もご一緒させていただくたびに私の稚拙なプレゼンテーションに、どこか良い点を見つけ温かく育てて下さいました。

先生のお名前をいただいた最後のEBMの会、来ておられたら、どんなご教示をなさったのでしょうか。先生への追悼を込めてプレゼンテーションさせていただきました。そして、先生と一緒にあゆまれたご出席の皆様から核心に迫る貴重なご意見をしっかりといただきました。今、大野先生・松下先生が、先生がお築きになった教室を引っ張っておられます。臨床糖尿病支援ネットワークも4月から代替わりします。

先生方のお築きになったものを、しっかりと次世代に渡したい。心よりご冥福をお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。

植木 彬夫先生を偲んで 東京医科大学八王子医療センター糖尿病・内分泌・代謝内科 小林 高明

私が植木彬夫先生に初めてお会いしたのは、1997年、医師になって2年目に八王子医療センターに内分泌代謝内科の研修医として赴任した時です。当時の東京医大は現在の研修制度とは異なり、1年間の初期研修終了後、2年目に当時の番号制の内科に入局するのが通例で、血液内科か膠原病内科で進路を考えていた私は第三内科に入局しました。八王子医療センター赴任時は、その後自分が糖尿病・内分泌・代謝内科にお世話になるとは全く思わずに当地に参りました。

医療センターでは植木先生と二人でグループを組み、植木先生が外来、私が病棟担当で、植木先生は外来で大勢の患者さんの診察をしておられ、外来後の病棟回診は夜7時をいつもこえました。

当時は今より糖尿病性足壊疽の患者さんが非常に多く、通常なら形成外科や皮膚科、整形外科等に入院して

手術を予定されるような患者さんが内科に多く入院していました。(2年目の私はそれが普通なのかと思っていましたが、その後に他の病院では通常ではないことがわかりました。)

毎日、回診時には自らの手で創消毒、包交をして、高価であったPG製剤と抗生剤の連日点滴、インスリンを使用する厳格な血糖コントロールを地道に継続し、結果として時間はかかっても大半の患者さんがアンパタなしか、もし施行するとしてもはるかに小さな範囲にとどまることが可能であることを臨床の現場で教えてもらいました。時には夜9時の消灯時間を過ぎることもあった回診につきあう看護師さんも大変そうで、『もう外科に任せたら』と看護師さんから言われた時に植木先生は『内科医が頑張ればまだこの足は残せるはずだ』と強い口調で反論されたのを今も覚えています。当時植木先生に治療をしていただいて下肢切断を回避できた患者さん達は、今も残せた自身の足で毎日地面を踏みしめて元気な生活をしていらっしゃると思います。

回診終了後は、一緒に遅い夕食を食べて、週に一回はMRさんとともに夜11時から地元のボーリング場に連れて行かれ、午前3時まで深夜にボーリングを10ゲーム連続で行い、終了後3時半にファミレスで夕食をとり、4時に解散して私は寮に帰って就寝。植木先生は部長室のソファで仮眠をとりそして翌日は9時から外来です。当時20代後半の私でさえ慣れるまできつい生活でしたが、既に50歳を超えていた植木先生の体がどれだけ頑強だったか、その年齢に今自分が近くなって本当に信じられない思いです。そのような公私の垣根をこえた生活の中で、糖尿病の患者さんとともに生きる人生を私は植木先生から学び、自然と糖尿病・内分泌・代謝内科に進路を変更することになりました。

その後も一緒にスキーをしたり、相模湾に船釣りにいったり、学会でけんかをしたり、一緒に過ごさせていただいた様々な思い出は尽きません。

患者さんと同じ目線で共に考えて治療にあたることは現在では当たり前のように言われていますが、あの当時から植木先生はそれを自然に実践しておられました。破天荒な側面もありましたが、20年前に運動療法の重要性をかかげて教育入院の中でそれを実践し、毎週月曜日の午後、ご自身が命名され開催していた『元気の出る糖尿病教室』では入院のみならず外来の患者さんが病棟に大勢来られて病棟のカンファレンス室に全員が座りきらない盛況ぶりでした。そして教育入院のレベルを押し上げた八王子医療センターは2007年に『オリコンエンタテイメント編 患者さんが決めたいいい病院 関東版』において全1052病院中で第1位に選ばれました。初めてお会いしてからもう24年が経過し私も大学病院に長く在籍していますが、大学のみならずこの世界で植木先生以上に患者さんと向き合い、また患者さんに愛される先生に未だお会いしたことがありません。

約10年前に東京医大を退官されたあとでも勢力的なお仕事を多方面でなされ、まだまだ日々ご活躍中で、昨年の夏も一緒に研究会のお仕事をさせていただいていました。そのような中、まだ教えてもらいたいことが沢山あって、そしていつでも聞けると思い込んでいました。

結果的に最後にお話する機会となった昨年夏のウェブカンファレンスで、会終了後に秋の海釣りのお誘いがあり一緒にするのを楽しみにしていましたが、10月に突然通勤中にお倒れになり、その後もお会いできないままお別れになってしまいました。

その存在感は私にとってあまりに大きすぎて、それはたぶん交流のあった方どなたも同じだと思いますが、まさに余人をもって代え難いとは植木先生にこそ相応しい表現なのだと思います。

いまだ悲しみはまだまだ私の胸中にありますが、植木 彬夫先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。



植木 彬夫先生を偲んで

中島内科クリニック 中島 泰

昨年の秋、いつも精力的に研究会等に参加されておられた植木 彬夫先生が体調不良のために会議を欠席になられるとお聞きし、病状を心配しておりました。結局、昨年5月の在宅事業委員会のZoom会議がお会いできた最後となってしまいました。先生の訃報に接し、本当に残念でなりません。植木 彬夫先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

先生のお名前はかつてから存じておりましたが、直接お会いしたのは2012年の末頃であったかと思います。私が中島内科クリニックを先代から引き継ぎ、多摩地区の勉強会に出席するようになってからでした。糖尿病の治療・合併症、療養指導に対する知識はもちろん、新しい話題についても広く深くご存じで感銘を受けました。それから10年、様々なことを教えていただきました。たしか、CSII/CGMの研究会で、間食や食事の摂り方についてisCGMを活用して患者さんと一緒に取り組まれたお話をされていました。本当に知識と経験に基づき、患者さんに寄り添った医療をなされているのだと感じました。また、他の先生方から、質問のメールをすると夜中でも即座にレスポンスがあり、ほとんど睡眠時間もとられないなどのエピソードをお聞きしておりました。委員会ではこちらが心配になるほどの責任感で多くの仕事をこなしておられ、自分も見習っていかなければ強く思う次第です。

植木先生は、「臨床糖尿病支援ネットワーク」での業績はもちろん、患者さんと医療者が一体となった糖尿病治療を具現化されておられたと思います。糖尿病への造詣が深く、また、その広い人脈から、多くの学ぶ機会をいただきました。植木先生のご指導に深く感謝し、植木先生のご冥福を謹んでお祈り申し上げます。

植木先生への追悼の言葉

武蔵野赤十字訪問看護ステーション 豊島 麻美

あれっ？ねえみんな…あの赤いスウェットの人、植木先生にそっくりじゃない…！！

2013年に熊本で開かれたJDSに参加後、我ら糖尿病療養支援チームの女性陣は、藤田先生(現、吉祥寺・藤田クリニック院長)がエスコートする秘境の温泉に1泊旅行に出かけました。野趣あふれる夕食の席の一角に…、

そうです。植木先生率いる熟年(!)グループがいらっしゃいました。なんという偶然でしょう。

「なんだ一、君たちも来ていたのかー。藤田先生いいねー。俺もそっちに泊まりたいー」

植木先生とのご縁が深まることになった、私にも、チームにも大切なエピソードです。

先生…。どうぞゆっくりお休みください。そして、天国からお守りください。

合掌。



新型コロナウェブシンポジウム(2021年9月)

近藤医院 吉田 敦行

心よりご冥福をお祈り申し上げます。

2021年9月27日に『新型コロナウイルス禍での糖尿病療養指導について』というウェブシンポジウムがありました。植木先生の特別講演『日常診療から感じるコロナ患者への対応』に引き続き行われるものでご講演が実質上の基調講演でした。また看護師2名、薬剤師1名、管理栄養士1名と私の5名がシンポジウムのパネリストあるいは司会を担当しており、その全員が様々な企画で先生とご一緒したりご教示を賜ったりしておりました。そのため準備段階からのご指導をお願いしたところ快くお引き受けいただきました。

植木先生はコロナ禍で苦境に陥っている患者に強い共感を示され、そのお気持ちはシンポジウムの原動力になりました。本当は実際に6名で一同に会し表情や語調も介し問題意識を共有できたならばより力強いシンポジウムを作れたらという気持ちはありますが、どのように患者を救うかというご出題に各職種で知恵を出し合い回答することはできました。今は各自直接関与している患者へ成果を還元している時期です。

新型コロナウイルス流行前は国分寺や立川の会議室で行われた在宅プロジェクト世話人会において定期的にご一緒させていただきました。何でもご存知の先生でしたが会議の進行自体は若いリーダーに任せ、要所で発言される以外は穏やかに参加者を見守っていらっしゃったり文書に目を通したりしていらっしゃいました。



発行元

一般社団法人 臨床糖尿病支援ネットワーク事務局
〒185-0012
国分寺市本町2-23-5 ラフィネ込山No.3-802
TEL:042(322)7468 FAX:042(322)7478
<https://www.cad-net.jp/>
Email:w_tokyo_dm_net@crest.ocn.ne.jp

編集後記



この度はたくさんの方々から追悼文をお寄せいただき誠に有難うございました。愛と熱意とバイタリティーに溢れていらした植木先生の長年の御功績はもちろんのこと、多くの皆様が大好きになってしまうそのお人柄が改めて偲ばれる号になりました。あとを託された私たち一人一人が遺志を継いで、患者さんやご家族に少しでも貢献していければと思います。改めて植木先生への感謝とともに心よりご冥福をお祈り申し上げます。 (広報委員長 杉山 徹)



一般社団法人

臨床糖尿病支援ネットワーク

Clinical Assistance of Diabetes Network